神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

Counterfactuality and Person

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 1999-09-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 益岡, 隆志, Masuoka, Takashi メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/1629

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

反事実性と人称

益岡隆志

1

慣用的表現「～すればよかった」について，森山・安達（1996）は，「実際にはそうしなかったというニュアンス」を表すとした上で，次のような例を挙げて，「「のに」は話し手が自分の行為について述べるときは使えない」，と指摘している。

（1） 僕も一緒に行けばよかった。

（2） 君も一緒に来ればよかったのに。

（3）*僕も一緒に行けばよかったのに。

これに次の（4）が許容されないことを考え合わせると，「～すればよかった」と「～すればよかったのに」にはそれぞれ人称に関する制限があることが分かる。

（4）*君も一緒に行けばよかった。

すなわち，「～すればよかった」の主体は1人称であり，「～すればよかったのに」の主体は2人称であるということである。

そこで，もう一度（1）と（2）について，その特徴を考えてみよう。（1）では，「僕は一緒に行かなかった」という事実に対して，その事実に反する表現を用いることによって，自分の行為に対する後悔の気持ちを表している。一方「のに」が付加された（2）では，「君は一緒に来なかった」という事実に対して，やはりその事実に反する表現を用いることによって，その事実に対する残念な気持ちを表している。このように，「～すればよかっ

た」と「～すればよかったのに」は反事実的表現である点は共通しているが，前者が自分の行為に対する後悔の意味を表し，後者が相手の行為に対する残念さの意味を表すという点は対照的である。

このことは，次の例にも当てはまる。

（５） 一緒に行かなければよかった。

（６） 一緒に来なければよかったのに。

（５）は，その主体が１人称であり，「一緒に行った」という事実を後悔する反事実的表現になっている。これに対して，「のに」が付加された（６）はその主体が２人称であり，「一緒に来た」という事実に対する残念さを表す反事実的表現である。

このように，「～すればよかった」は，後悔・残念さの意味を表す反事実的表現であるが，「のに」の有無によってその主体の人称が決まる点が興味深い。

2

それでは，１節で観察した事実は「～すればよかった」という表現だけに見られる孤立した現象なのであろうか，それともより一般性のある現象なのであろうか。この点を明らかにするために，次に，後悔・残念さの意味を表す反事実的表現をいくつか取り上げることにする。

まず，「～すべきだった」という表現を観察してみよう。次の例を見ていただきたい。

（７） 一緒に行くべきだった。

（７）の表現の主体は誰であろうか。２人称という解釈も不可能ではないが，通常は１人称と解釈されよう。そして，（７）は，一緒に行かなかったという事実を後悔する内容の反事実的表現になっている。

これに関連して，次の（８）を見てみよう。

（８） 一緒に行くべきではなかった。

（8）の主体も1人称と考えられ，この表現においては，一緒に行ったという事実に対する後悔の気持ちが表されている。（8）も後悔の意味を表す反事実的表現である。

それでは，「のに」を付加するとどうなるであろうか。

（9） 一緒に行くべきだったのに。

（9）の主体は1人称ではなく，2人称である。

（10）*僕も一緒に行くべきだったのに。

（11） 君も一緒に行くべきだったのに。

（9）では，相手が一緒に行かなかったという事実が残念であるという話し手の気持ちが表されている。すなわち，残念さの意味を表す反事実的表現である。次の（12）も同様の表現である。

（12） 一緒に行くべきではなかったのに。

（12）も残念さを表す反事実的表現であり，相手が一緒に行ったという事実に対する話し手の残念な気持ちが表されている。

このように，当為の意味を表すとされる「～すべきだ」という表現は，「～すべきだった」という形式を取ることによって，後悔・残念さの意味を表す反事実的表現になることが分かった。また，「のに」の有無が主体の人称のあり方と深く関わり合っている点は，きわめて興味深いことである。

次に，「～したほうがよかった」という表現を見てみよう。まず，（13）の例を見ていただきたい。

（13） 一緒に行ったほうがよかった。

（13）の文の主体は，1人称とみなすのが自然であり，2人称であるとは考えにくい。そしてこの文は，自分が一緒に行かなかったという事実を話し手が後悔しているというのが通常の解釈である。後悔の意味を表す反事実的表現と考えられるわけである。次の（14）も同様の性格のものである。

（14） 一緒に行かないほうがよかった。

（14）も通常，主体は1人称であり，一緒に行ったという事実に対する話し

手の後悔の気持ちが表されている。この文もまた，後悔の意味を表す反事実的表現とみなされる。

これらの文についても，「のに」の付加がどのような結果をもたらすかを確かめることにしよう。

(15)　一緒に行ったほうがよかったのに。

(15) の主体は 2 人称である。このことは，次の例に示される。

(16) *僕も一緒に行ったほうがよかったのに。

(17)　君も一緒に行ったほうがよかったのに。

(15) は，相手が一緒に行かなかった事実を話し手が残念がっていることを表している。残念さの意味を表す反事実的表現である。同様のことが次の (18) にも言える。

(18)　一緒に行かないほうがよかったのに。

(18) の主体が 2 人称であることは，次の例が示すとおりである。

(19) *僕は一緒に行かないほうがよかったのに。

(20)　君は一緒に行かないほうがよかったのに。

(18) は，相手が一緒に行った事実に対して，話し手が遺憾に思っていることを表す反事実的表現である。

かくして，「～したほうがよかった」という表現も後悔・残念さの意味を表す反事実的表現であること，さらには，「のに」の有無によって主体の人称が定まること，が明らかになった。

次に，もう一つの例として，寺村 (1971) が「過去に実際しなかったことを，すべきであったと主張・回想する」表現として挙げている (21) の文を見てみよう。

(21)　あそこは買いだった。

(21) では，「買う」という動作の主体は 1 人称であり，自分が買わなかったことに対して，買うべきであったという話し手の後悔の気持ちが表現されている。この文を否定すると，(22) が得られる。

(22)　あそこは買いではなかった。

(22) も，主体は1人称であり，買ったことに対する話し手の後悔の気持ちを表す反事実的表現である。

ここでも注目すべきは，「のに」を付加した場合である。(21) と (22) に「のに」を付けてみよう。

(23)　あそこは買いだったのに。

(24)　あそこは買いではなかったのに。

「のに」が付いたことにより，(23) と (24) は動作の主体が2人称になり，それぞれ，相手が買った事実，買わなかった事実に対して，話し手が残念に思っていることを表している。これらの文はともに，残念さの意味を表す反事実的表現となっているわけである。

以上見てきたように，「～すべきだった」，「～したほうがよかった」，「あそこは買いだった」のような表現はいずれも，後悔・残念さの意味を表す反事実的表現であり，「のに」を伴うか否かによって，主体の人称が定まるということが言える。このことは，前節で観察した「～すればよかった」という表現に見られる特徴が一般性の高いものであるということを意味する。後悔・残念さの意味を表す反事実的表現では，「のに」の有無と主体の人称のあり方との間に相関関係があるということが明らかになった。

3

前節までで，「～すればよかった」などの反事実的表現とその主体の人称の関わりについて考察してきたのであるが，反事実的表現を代表するのは，言うまでもなく，「反事実的条件文」と呼ばれる表現である。そこで，本節では，反事実的条件文に目を転じて，人称のあり方との関わりを探ってみたいと思う。

日本語の反事実的条件文の研究は近年になって注目を受けるようになり，最近の研究としては工藤 (1997)，赤塚 (1998)，安田 (1998) などが挙げら

れる。これらの研究の中で，本稿の考察に深く関係するのは安田（1998）の研究である。

安田（1998）は，反事実的条件文が多くの場合，感謝，後悔，安堵，残念，怒りといった話し手の感情を間接的に表現するということを具体的な事例を挙げて論証している。本稿にとって特に重要な意味を持つのは，後悔・残念という感情を表現するタイプの反事実的条件文である。

この種の反事実的条件文の例として，(25) を観察してみよう。

(25)　あの時もう少し注意していれば，こんなことにはならなかった。

この場合，事実としては「あの時十分注意しなかった」ということなのであるが，それでは，注意しなかった主体は誰であろうか。2人称ということも考えられないわけではないが，通常の解釈では1人称ということになろう。(25) は，自分が十分注意しなかったためにこんなことになってしまった，という話し手の後悔の気持ちを表している，というのが最も自然な解釈である。

それでは，(25) の文に「のに」を付けるとどうなるであろうか。

(26)　あの時もう少し注意していれば，こんなことにはならなかったのに。

(26) は (25) とは違って，注意しなかった主体は1人称である可能性よりも2人称である可能性のほうが高い。この文は，相手が十分注意しなかったためにこんなことになってしまった，という話し手の残念な気持ちを表現している，と考えられるのである。この場合も，「のに」の有無が主体の人称のあり方と深く関連しているわけである。

反事実的条件文について，今度は前件が否定表現となる例を見てみよう。

(27)　あの時名簿の名前を見落としていなかったら，こんな結果にはならなかった。

(27) は「あの時名簿の名前を見落としたために，こんな結果になってしまった」という事実に対する反事実条件を表しているが，名簿の名前を見落とした主体は，やはり1人称と見るのが最も自然であろう。話し手の後悔の気持

ちが表れているという意味合いが強いように思われる。

「のに」を伴った（28）の場合はどうであろう。

（28）　あの時名簿の名前を見落としていなかったら，こんな結果にはならなかったのに。

（28）の最も自然な解釈は，「あの時あなたが名簿の名前を見落としたために，こんな結果になってしまった」ことに対する話し手の遺憾（残念さ）の気持ちが表されているというものであろう。「のに」が付いた場合，名簿の名前を見落とした主体は2人称と見るのが最も適切であろう。

以上，後悔・残念さの意味を表す反事実的条件文を対象として，「のに」の有無と主体の人称の関連性を中心に観察してみた。反事実的条件文の場合は，前節までで見た「～すればよかった」のような表現とは異なり，「のに」の有無と主体の人称の関係がややあいまいになる傾向は否めない。それでも，相対的に見て最も自然な解釈は何かという観点からすれば，「のに」を持たない反事実的条件文（後悔の意味を表すもの）は前件の主体が1人称であり，「のに」を持つ反事実的条件文（残念さを表すもの）は前件の主体が2人称である，という原則は維持できるものと思われる。

かくして，後悔・残念さの意味を表す反事実的表現は，「のに」を持たない場合は主体が1人称であり，「のに」を持つ場合は主体が2人称である，という一般的な原則が導き出されたことになる。

4

ここで，もう一度「～すればよかった」という表現に戻ってみよう。次の（29）と（30）を比較していただきたい。

（29）　もっと早く行けばよかった。

（30）　もっと早く行けばよかったのに。

（29）は主体が1人称であり，後悔の意味を表す反事実的表現である。これに対して（30）は主体が2人称であり，残念さの意味を表す反事実的表現で

ある。このように，「～すればよかった」は，後悔の意味を表す場合（「のに」が付かない場合）と残念さを表す場合（「のに」が付く場合）との違いを最も明瞭な形で表す表現である。

（29）と（30）を比べてみると，両者は文体の面でも違いがあることに気がつく。すなわち，（29）は自分自身に語りかける独話文の性格を持ち，（30）は聞き手に語りかける対話文の性格を持つということである。これは，自分自身の行動に対する後悔の気持ちを表すことが独話の形式を要求し，相手の行動に対する残念さの気持ちを表すことが対話の形式を要求する，ということなのであろう。（29）と（30）がそれぞれ，独話文と対話文の性格を有していることは，終助詞「なあ」の付加の可能性により確認することができる。「なあ」は，森山（1997）の指摘にもあるように，一般に，独話文に付加されるという性格を持つ。そして，次の例が示すように，「なあ」は後悔の意味を表す反事実的表現には付加できるが，残念さの意味を表す反事実的表現には付加できない。

（31）　もっと早く行けばよかったなあ。

（32）*もっと早く行けばよかったのになあ。

後悔の意味を表す反事実的表現が独話文の性格を持ち，残念さの意味を表す反事実的表現が対話文の性格を持つことは，「～すればよかった」という表現に限ってのことではない。これまでに見た様々な例に関してこのことは当てはまるのである。まず，後悔の意味を表す反事実的表現が一般に独話文の性格を持つことを見ておこう。

（33）　もっと早く行くべきだったなあ。

（34）　もっと早く行ったほうがよかったなあ。

（35）　あそこは買いだったなあ。

反事実的条件文の場合も，後悔の意味を表す場合には，前件に「なあ」を付加することができる。

（36）　あの時もう少し注意していればなあ。

他方，残念さの意味を表す反事実的表現は一般に対話文の性格を持つ。この種の表現には「なあ」を付加することはできない。

(37) *もっと早く行くべきだったのになあ。

(38) *もっと早く行ったほうがよかったのになあ。

(39) ？あそこは買いだったのになあ。

(39) は許容される場合があるかもしれないが，その場合は，後悔の意味を表す表現として用いられているものと考えられる。また，反事実的条件文についても，残念さの意味を表すときは，前件に「なあ」を付けることはできない。((40) の＃の印は，残念さを表す場合には不適格となるということを表している。)

(40) ＃あの時もう少し注意していればなあ。

以上，後悔の意味を表す反事実的表現が独話文の性格を持ち，残念さの意味を表す反事実的表現が対話文の性格を持つことを見てきたのであるが，次に，このような原則が部分的にゆるめられる場合があることを指摘しておこう。

まず，後悔の意味を表す表現についてであるが，次の例のように，2人称の「あなた」を取り込んだ表現の場合には，対話文の性格を帯びることになる。

(41) あなたに相談すればよかった。

(42) あなたに相談すべきだった。

(43) あなたに相談したほうがよかった。

後悔の意味を表す表現であっても，「あなた」が用いられれば，独話文とはなり得ないわけである。ただし，次の例が示すように，「なあ」の付加は許される。

(44) あなたに相談すればよかったなあ。

(45) あなたに相談すべきだったなあ。

(46) あなたに相談したほうがよかったなあ。

この事実は，「なあ」が対話文に付加できる場合があるということを示唆している。

他方，残念さの意味を表す表現についても，独話文の性格を帯びる場合がある。その事例として，ここでは，残念さの意味を表す文が「～と思う」のような表現に埋め込まれる場合を挙げておこう。次の例を見ていただきたい。

(47) ？あの人も一緒に来ればよかったのに。

(48) あの人も一緒に来ればよかったのにと思った。

(47) は，残念さの意味を表す表現の主体には3人称が現れにくいことを示している。対話文である限り，残念さを表す表現の主体は2人称に限られるということである。これに対して，(48) のように，「～と思った」という表現に埋め込まれると，3人称を主体とすることが許される。

これは，「～と思った」という表現に埋め込まれることによって，「あの人も一緒に来ればよかったのに」という文が心内文の性格を持つことになるからである。心内文というのは広義の独話文に含まれるものである。したがって，(48) は残念さの意味を表す文が「～と思った」という表現に埋め込まれることによって独話文の性格を帯びる，ということを示している。ただし，完全な独話文になっているわけではない。と言うのも，完全な独話文であれば，次の例に示されるように，3人称を主体とすることは許されないからである。

(49) *あの人も一緒に来ればよかったのに。

この事実を考慮に入れると，(48) における「あの人も一緒に来ればよかったのに」という表現は，対話文と独話文の中間に位置づけられるものと考えられる。

以上，本節では，後悔の意味を表す反事実的表現が独話文の性格を持ち，残念さの意味を表す反事実的表現が対話文の性格を持つこと，及び，このような原則が部分的にゆるめられる場合があること，を観察した。

5

最後に，3節で提出した，後悔・残念さの意味を表す反事実的表現は，「のに」を持たない場合は主体が1人称であり，「のに」を持つ場合は主体が2人称である，という原則に対する例外をいくつか挙げることにする。

そのような例外の一つは，「～したかった」という表現である。次の例を見ていただきたい。

(50)　このことにもっと早く気づきたかった。

(50) は，このことにもっと早く気づけばよかったという話し手の後悔の気持ちを表している。問題は，このような表現に「のに」を付加した場合である。

(51)　このことにもっと早く気づきたかったのに。

(51) は「のに」が付いているにもかかわらず，「気づく」主体は1人称のままであり，先の原則の例外となる。その理由は，「～したかった」という表現が話し言葉の場合，常に，動きの主体が1人称に限られるからである。「のに」を付加しても，この性質は変わらないわけである。

第2の例外として，次のような表現がある。

(52)　君が（あの人が）一言言っておいてくれれば，こんなことにはならなかった。

(52) は「のに」を持たないにもかかわらず，前件の主体が2人称（または3人称）になっている。これは，前件に「～てくれる」という表現が用いられていることに起因するものと思われる。「～てくれる」という表現は，その主体が1人称になることは許されない。そのため，「のに」を持たないにもかかわらず，2人称（または3人称）が主体となることができるのである。(52) が先の原則の例外になるのは，「～てくれる」という表現が持つ個別的な性質のためである。

次に，もう一つの例外として「～するのだった」という表現を見てみたい。

(53)　こんなことなら，もっと早く行くのだった。

(53) は，早く行かなかったことに対する話し手の後悔の気持ちを表している。この文の主体が1人称であることは，先の原則に合致する。問題は，「のに」を付けた場合である。

(54) *こんなことなら，もっと早く行くのだったのに。

先の原則からすれば，(54) は2人称を主体として成り立つはずであるが，実際にはそのようなことは許されない。((54) は1人称を主体としても不成立である。) なぜ許されないかは，今のところ明らかではない。恐らくは，「～するのだった」という表現に固有の何らかの性質が関係しているのであろうが，この点の解明は今後の課題としたい。

6

以上，本稿では，後悔・残念さの意味を表す反事実的表現とその主体の人称のあり方との関係をめぐって考察を行った。その結論は，後悔・残念さの意味を表す反事実的表現は「のに」を持たない場合は主体が1人称であり，「のに」を持つ場合は主体が2人称である，ということが基本的に成り立つことである。このことに加えて，基本的に，1人称を主体とする反事実的表現が独話文の性格を持ち，2人称を主体とする反事実的表現が対話文の性格を持つ，ということも明らかになった。

反事実的表現に人称のあり方が深く関わるという事実は，反事実的表現に関して今後研究を進めるに当たって留意すべき事柄であろう。

参考文献

赤塚紀子　1998「条件文とDesirabilityの仮説」『モダリティと発話行為』研究社出版

工藤真由美　1997「反事実性の表現をめぐって」『横浜国立大学人文紀要第Ⅱ類(語学・文学)』44号

谷口秀治　1995「反実仮想を表す日本語表現について」『広島大学留学生センター紀要』6号

寺村秀夫　1971「‘タ’の意味と機能――アスペクト・テンス・ムードの構文的位

置づけ――」『言語学と日本語問題』くろしお出版
森山卓郎　1997　「「独り言」をめぐって――思考の言語と伝達の言語――」『日本語文法　体系と方法』ひつじ書房
森山卓郎・安達太郎　1996　『文の述べ方』くろしお出版
安田眞由美　1998　「感情表出表現としての日本語の反事実的条件文に関する考察――談話資料を手がかりに――」*Kansai Linguistic Society* 18，関西言語学会